

令和 3 年度

# 1 自己評価及び外部評価結果

事業所名 : グループホーム 美葉

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372700716		
法人名	有限会社チバコム		
事業所名	グループホーム 美葉		
所在地	〒029-0803 一関市千厩町千厩字岩間38-4		
自己評価作成日	令和3年7月28日	評価結果市町村受理日	令和3年11月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>・現在は新型コロナ感染防止の観点から、実施回数は減っている状態であるが、散歩やドライブ、地域行事見学など屋外に出掛ける機会を多く取り込むことで、脚力低下の防止に努めている。</p> <p>・重度化イコール退居ではなく、介助でも食事や水分の摂取が可能な状態であれば支援を継続する方向で取り組んでいる。</p>
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>隣近所や幼稚園から野菜の差し入れがあったり、中学生のボランティア活動・高校生の職場体験など交流が密な農村地域にあって、地域と共に家庭的な雰囲気の中で運営されている。家族や地域住民に配布されている広報「美葉め〜る」の中に『ちよこっと介護情報コラム』コーナーを設け介護保険の申請方法や認知症への対応、グループホームの内容など介護に関する情報を発信し、事業所が持つ情報を地域に還元している。グループホームを自立に向けた生活の場と位置づけ、利用者の特技を活かし、あるいは排泄の自立に向けた介護に努めている。また、コロナ禍のなか活動や交流が制限されてはいるが、毎日午前中にミニドライブ出かけ、周辺を散歩し、畑づくりや野菜の収穫、流しソーメンやバーベキューの屋外での食事など野外活動に熱心に取り組み、利用者の心身のリフレッシュに特に工夫を凝らしている。</p>
---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和3年10月13日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念のひとつに「地域の中で地域と共に生きる」という項目がある。職員が支援に迷ったときには運営理念に戻ることを基本としている。そのため、見え易い場所に掲示している。	設立時の思いを込め、家庭的な雰囲気の中で利用者が穏やかな日々を送れるよう、「共・安・健・穏（「地域の中で地域と共に、安らかな雰囲気、自立に向かって、自分のペースで）」を理念とし、利用者の自己決定を尊重し、自分のできることは自分ですよう見守り支援をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の方が花や野菜を届けてくれることも多くある。コロナ感染防止で中止となっているが、ホームの祭りや運営推進会議への参加もある。	事業所開設前から地区振興会との交流があり、行事への協力や野菜の差し入れなど多大な支援を得ている。利用者家族と北の沢地区20余世帯に配布している広報「美葉め～る」の中に『ちよこっと介護情報コラム』コーナーを設け、介護保険の申請方法や認知症への対応、グループホームの内容などの情報を発信し、事業所が持つ情報を地域に還元している。コロナ禍であるが、高校生の職場体験などの交流も行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎月発行のホーム広報を地域にも配布している。広報の内容に「ちよこっと介護コラム」のコーナーがあり、グループホーム、認知症、介護申請などの情報を載せている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	市職員、自治会長、振興会長、民生委員、地域住民の参加があり、各方面からの情報を頂ける。ホームからの要望にも早い対応を頂き助かっている。ただ、家族の参加がない状況が悩みである。	委員が参加しやすいように、年度当初に1年分の日程を決め案内している。コロナ感染対策のため今年度は書面会議としている。自治会長、振興会長、民生委員、地域住民の委員に生活状況や行事について説明している。近所の方からぜひ参加したいとの申し出があり対応を検討している。利用者家族全員に案内を出しているが出席が無いのが残念としている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	居室の空き情報について連絡があったり、運営推進会議で活動状況を伝えている。災害予報時には、その前後に注意と安全確認の連絡を頂いている。	警報発令時などには担当課から情報提供がある。要介護認定申請は広域行政組合に出向き手続きしている。生活保護ケースワーカーを含め、行政関係機関との関係は良好で連携協力体制が取れている。	

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化検討委員会を3ヶ月に1回開催（現在は紙面）その中で拘束廃止に関するスタッフ全体への研修があり、毎回内容を変えて身体拘束の例や拘束をしない工夫などについて研修をしている。玄関の施錠に関しては現在の入居者の状況から施錠の必要はない。	管理者と職員を委員として、3カ月に1回、職員会議の後に委員会を開催している。毎月の研修の中に身体拘束をテーマに盛り込んでいたが、体制上の理由から、開催回数が減少しがちとしている。3人の歩行不安定な方（美葉2、アネックス1）は、家族の同意に下でベッドセンサーを利用している。	身体拘束の適正化を進める上でも、他事業所との人的交流や職員が企画する例月の研修の再構築について検討されることを期待します。また、スピーチロック防止のためにも、外部講師による「接遇研修」の実施について検討することが望ましいと思われま
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	スタッフ会議の中で、虐待の種類や例について研修し、暴力だけが虐待では無いことを理解している。また、身体拘束も虐待に直結することを周知している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度の対象となるケースがなく、学ぶ機会は少ないが制度の存在は把握しており、家族に説明した例はある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前は入居料に関する問い合わせが多い。入居時に契約書、重要事項説明書、個人情報利用同意書の説明を行い、押印を頂いている。介護報酬の改定については、文章で説明を行うが少額の改定の場合、同意書までは頂いていない。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に用紙とご意見箱を設置している。毎月発行の広報紙でも意見、要望、助言などを随時受け付ける姿勢で取り組んでいることを記載している。運営推進会議開催時には参加した入居者に要望を確認していた。	家族からは、面会や通院で来所した時間き取るよう努めているほか、玄関には意見箱を設置している。各ユニット1、2人を除き、利用者の意思を言葉で把握している。利用者家族に運営推進会議の案内を出したり、広報紙を通じ意見、要望を募っているが、家族の反応ははかばかしくない。	事業所運営の改善に資するため、事業所独自の家族アンケート実施が期待されます。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフ会議やカンファレンスの際、ケアに対する意見を聞く機会があり、実践につなげることが多くある。	毎月開催するユニットごとのスタッフ会議や連絡ノートへの記載、リーダーへの申し出により、職員の意見要望等を把握している。利用者のリハビリパンツから布パンツへの変更などの意見があり対応している。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 美葉

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	自分の働ける範囲の時間で勤務する職員も採用している。給与に関しては介護報酬から支払われるものであり、事業者だけの努力には限界がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	人員配置の面で余裕がないことやコロナ禍にあって、積極的に外部の研修受講を進められない状況である。 内部研修も現在は書面で実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	以前は他のグループホームと交換実習や懇親会を実施していたが、現況(コロナ)では無理の状態である。居室の空き情報や待機者数等に関しては情報交換している。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に生活の場(自宅、医療機関、施設)で面談を実施し情報収集に努めている。また、担当の介護支援専門員からも情報を頂き、できるだけ今までと変わらない生活を送れる支援の提供を心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込みの時点で家族の困っていることや不安なことを聞き取りしている。共同生活のため、全ての要望に応えられるわけではないが、本人と家族の希望をケアプランに載せ、作成している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	支援対策は一人ひとりに違いがあるので、その人に必要な支援を見極めている。共同生活の継続が困難な場合は他の施設や医療機関を紹介する支援も行っている。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の好きなこと、嫌いなこと、本人が安心すること不穏になる状況を把握し支援している。また、本人のできる軽作業を無理なく行うことで役割や責任と捉え、本人が自信をもって生活できるよう支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の協力なしでは支援の継続が困難な場面もある。コロナ禍に加え、遠方に住む家族の場合は本人に中々会えないのが現状である。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現在は、面会制限していることもあり、以前のように面会者が来られることも少ない。それでも、短時間の決められた場所での面会を支援している。	コロナ感染対策のため面会が制限されているが、家族とは短時間、決まった場所での面会だが関係が途切れないようにしている。利用者の中には、かかりつけの隣の床屋に通ったり、同じ市営住宅で一緒だった利用者同士がユニットを越えて交流が復活している方もいる。知人からの葉書に、職員が支援して返事を出している利用者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	折り合いの良くない入居者もいる。以前トラブルになった状況を把握し、現在は事前に回避できている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約解除後の連絡や相談は無い。		

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	共同生活の場であることを理解し、強い要望を求めない入居者もいる。危険のリスクは伴うが入居者の自己決定も尊重し、可能な範囲での見守り、付き添いの援助を行っている。	入居時のアセスメント情報を共有し特技などを把握している。介護計画に基づき、歩けない方に花壇の草取りをしてもらったら、畑仕事までできるようになり、いきいきと笑顔で生活するようになった例もある。職員との会話や行動・表情から思いを把握している。	
----	-----	--	--	---	--

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に家族、施設、担当介護支援専門員などから情報収集していることで把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の出来ること、好むことを継続出来るように支援している。本人が不安になる時間帯や不安材料を把握しているので、不安な時間帯が長引くことのないよう、事前に意識の方向を変えることで回避している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的な見直し以外にも本人の言動の変化や身体的変化、入院があった場合にカンファレンスを行いケアプランの見直しをする。カンファレンスに参加できない職員には事前に記録用紙を準備することで、情報や意見が多く集まる。計画作成担当者はカンファレンスの情報を元に計画書の見直しを行う。職員は計画書の内容に基づいた支援を提供する。	アセスメントのチェックはタブレットに入力し、各ユニットで、それぞれケアマネや計画作成担当者が介護計画案を作成している。各ユニットで開催するカンファレンスに基づき、ケアマネ、計画作成担当者が入居1カ月後、以降3ヶ月ごとに計画の見直しを行なっている。利用者と家族の意見要望や必要に応じて医師の意見を聞き計画に盛り込んでいる。それぞれのユニットで介護計画を一冊のファイルにまとめ、職員がいつでも見れるように改善することとしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録も職員の大きな負担となっていたため、現在はタブレット入力とし、排泄、服薬、食事水分摂取、入浴、リネン交換、バイタルの他、特記事項のみの入力とした。職員間の情報共有としては連絡ノートに記入し、出勤時と退勤時に確認することとしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	屋内で過ごす時間が多くなり過ぎないように、ドライブを多く取り入れ屋外へ出掛ける機会を提供している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町内で開かれるイベントの見学や初詣に出掛ける支援を行っている。7月には恒例の昼食会を実施していたがコロナ禍にあり、昨年からはホームで行えるバーベキューを実施している。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的な受診は入居前からの医療機関を受診している。訪問診療、訪問歯科診療、訪問看護を受けている入居者もおられる。家族の都合などにより医療機関を変更する場合は町内の専門医を紹介することもある。	入居前からのかかりつけ医の方が11人おり、家族の付添いで受診し、国保藤沢病院の訪問診療(月に1、2回)を7人が受診している。家族が直接歯科医師と契約した訪問歯科診療利用者は5人で、2週に1回の訪問診療を受診している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職の配置はない。訪問看護や訪問診療の際に看護師や医師に入居者の情報を提供することで適切な診療を行えている。また、専門職からのアドバイスをケアの参考に役立てている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時には職員が同行し、情報提供を行う。入院中の経過を確認するための医療機関とのカンファレンスもある。退院時にも職員が立ち合い、服薬や退院後の注意点の説明を受け、ケアに活かしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取り加算を申請していないため終末期に向けた方針はない。ただ、重度化し、共同生活の継続が困難な場合でも職員の介助で食事や水分が摂取出来るようであれば可能な限り支援を続ける方向である。勿論、入居の望みがあるのであれば、次の段階の施設利用についても相談、支援を行っている。	入居時に、家族に対し要介護3で特別養護老人ホームへの入所申込みをするよう促し、事業所の対応を説明している。重度化が進行した場合でも、食事を工夫しシャワー浴とし、職員が対応できる限りの介護を行ないながら、特養の空きを待つのが通例である。医療が必要になった場合には入院調整しており、事業所での看取り対応は行っていない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時、事故発生時の対応マニュアルに沿って対応することになっている。初期の対応が重大であることは職員に説明している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	浸水地域とはなっていないが、避難場所を第1、第2と指定している。地域住民との合同による防災訓練や運営推進会議で協力体制を確認した。夜間帯を想定した避難訓練も実施した。	地域住民の協力を得て年2回(消防立合い1回、夜間想定1回)の避難訓練を実施している。「美葉」に隣接する空き地を避難場所にし、普段から散歩のコースにして日常生活に溶け込ませている。ハザードマップでは指定地区になっていないが、千厩高校が避難所に指定されている。	避難に際して、地域の方々にどのような役割を担ってもらうか、実際に訓練参加を通じて確認し、アイデアの提供を受けるなど、地域の方々の協力のもとで、避難訓練の方法を工夫されることを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	例えば認知症を患ったとしても、大変な時代を生きて来られた人生の大先輩方である。個人個人の言動を否定しない対応や声掛けを意識している。特に排泄の失敗は他入居者に気付かれないように処理をしている。	「その話は何度も聞いた」「そのことは何度も言った」「なんでそんなことをするの」など利用者を否定する話し方をせず、利用者の間違いを指摘することがないように特に注意して声かけをしている。利用者の得意なことを把握し、それぞれが役割を持って生活できるよう支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食事メニューの要望やドライブの行き先、屋外で過ごしたい時、庭の散歩等、危険が伴わない範囲で行動が出来るよう自由として、見守りや付き添いを強化し対応。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務を優先しなければならない状況も多々ある。また、事故に繋がるリスクもあるが入居者の自由を基本としている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	基本的には家族が準備した衣類の着用となる。本人が好まないようであれば着用を勧めることはない。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎食のメニューを入居者から見えるところに掲示している。時には入居者の要望でメニューが決まることもある。おしぼりたたみや下膳、食器洗い等、出来る範囲で手伝って頂きながら職員と行っている。	献立は職員が作成しているが、利用者の希望を取り入れて変更になることもある。誕生会には手作りのケーキでお祝いし、畑で採れた野菜を使った料理や流しソーメン、バーベキューやサンマ焼きなど楽しんでいる。テーブル拭きや下膳など、それぞれが無理なくできる役割を持ち職員を手伝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事制限の掛かる入居者はいない。毎食毎の摂取量や1日の水分量をタブレット入力で記録管理し、体調不良等の目安として役立てている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	訪問歯科診療を受けている入居者も多く、医師からのアドバイスが口腔ケアの参考になっている。入れ歯の方は食後や就寝前に職員の声掛けと支援で洗浄をしている。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ポータブルトイレは設置せず、トイレでの排泄を基本として支援している。個人個人の24時間、1時間毎の排泄チェック表があることで個人の排泄パターンや誘導のタイミングが把握でき、失禁を減らすことやトイレでの排泄に繋がっている。	チェック表により排泄パターンを把握している。見守りは必要だがほぼ自立が13人、4人程が介助を要し1人だけトイレに誘導している。リハビリパンツから布パンツになった方3、4人、自宅でポータブルを利用していたが止めた人が2、3人いる。歩行不安のため、夜間にセンサーを利用している方は3人いる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	服薬が多量だったり運動量が少ない高齢者の特徴である便秘症状緩和の為、繊維質の食べ物の提供や水分調整、場合によっては個人に合わせた便秘薬服用のタイミングをコントロールし対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそうした支援をしている	職員配置の多い時間帯で安全に入浴出来ることを第1優先で実施している為、入居者の希望通りとはなっていない。そのことに対しては入居者からの不満や拒否、苦情は聞かれていない。	毎日午後が入浴時間で、一日3人、利用者は週2、3回25分位入浴している。打撲や傷、体調のチェックをしている。入浴剤を利用しリラックスするよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼寝の習慣の有無、就寝時間を個人個人で把握しており、声掛けや誘導で就寝介助を行っている。レクリエーションの時間帯に居室で休まれていたとしても参加を強要することはない。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬説明書を預かることで効能や効果、注意事項を確認している。副作用の症状が疑われた場合は家族や医師、薬剤師に情報提供し指示を受ける。時には服薬の中止や変更の場合もある。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の出来ること、出来ないことを把握しており、出来る軽作業を継続できるように支援することで、本人がやりがいや責任を感じることで日課となっている方も多くおられる。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ホームの特徴は屋外活動の機会を多く提供することであるが、コロナ禍であることからその機会は減っている。それでも人混みを避けたドライブや散歩を実施している。家族や地域の協力で出掛けることはない。	毎日必ず午前中(10時30分～11時30分)に3、4人でミニドライブを楽しんでいる。事業所周辺の散歩や畑仕事など屋外での活動に積極的に取り組んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を使う機会は少ない。所持していないことへの不安を職員は理解しており、安心出来る声掛けを実施している。管理可能な方には家族さんの同意を得て所持している方もおられる。ホームでは個人預り金として管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	自ら電話を希望する場合は、帰宅願望に関するケースであり、家族の状況を考えると電話をしないことが多い。本人が落ち着ける声掛けを職員は理解していることで緩和できている。手紙の返事を書く方もおられる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホールと台所が対面式となっており、調理の音や匂いを感じ取れる。入居者が手伝う場合もスムーズに移動できる。また、調理しながらでも入居者の見守りが出来ることで事故防止にも繋がる。廊下は歩行障害になる物は置かなこととしている。玄関での転倒も予想されるため厚手のマットを敷いている。	ホールの壁には、季節の装飾、ミニドライブや誕生会、畑で収穫した野菜や散歩の様子を撮った笑顔満載の写真が配置良く飾られている。対面式キッチンで、調理する様子が食欲をそそり、配膳や下膳などの手伝いもしやすいものとなっている。利用者は、足し算や掛け算の問題をクイズ形式で解いたり、体操やゲームをしたりしてリラックスして過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳敷きの子上がりがあり、自由に使用できる。廊下の端に椅子を備え一人で過ごせるスペースとしている。屋外にも椅子を設置することで、散歩後もゆっくりと過ごせる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族から入居前のベッドの位置やタンスの位置の確認を行い、出来るだけ同じような環境づくりをしている。居室のスペースに収まる範囲で趣味の物や気に入っている物、本人が安心出来る物の持ち込みが可能であることを伝えている。	部屋を間違えないよう、各居室の入り口に名前が表示されている。洗面台、パネルヒーター、ベッド、整理ダンスが備え付けられ、使いやすい部屋になっている。壁には、家族の写真などが飾られ居心地よい部屋に工夫されている。	

令和 3 年度

## 2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 美葉

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや自室が認識出来ない方もおられる。判り易い表示にしたり、居室入り口に名前を表示することで自分の部屋、他の人の部屋であることを確認できるようにしている。		